

# 柳 宗悦の民芸論 (XI)

—民具研究の方法—

八 田 善 穂

- (1) 『蒐集物目安』
- (2) 『民具蒐集調査要目』
- (3) 『民具問答集』まへがき
- (4) 民具と民芸
- (5) アチック・ミュージアムの活動

筆者は拙稿「柳宗悦の民芸論 (V)<sup>1)</sup>」において「民具と民芸」の問題を扱った。本稿はその際ふれることのできなかつた点についての追補である。

## (1) 『蒐集物目安』

昭和47年から翌年にかけて三一書房より刊行された「日本常民生活資料叢書」全24巻は、渋沢敬三<sup>2)</sup>が設立したアチック・ミュージアム（後に日本常民文化研究所）の戦前の研究成果を編集したものである。全巻の構成は次のようになっている。

- 1 民具篇
- 2～4 水産篇
- 5 農業篇
- 6 社会経済篇

---

注1) 徳山大学経済学会論叢第28号（1987年12月）所収。

2) 1896（明治29）－1963（昭和38）。

- 7 北海道篇
- 8～10 東北篇
- 11～12 関東・北陸篇
- 13～17 中部篇
- 18～19 近畿篇
- 20～23 中国・四国篇
- 24 九州・南島篇

このうち第1巻「民具篇」には、有賀喜左衛門<sup>3)</sup>による長文の総序をはじめ、アチック・ミュージアム篇「民具問答集」、同「民具蒐集調査要目」等が収載されている。拙稿（V）においてはこれらの資料についてはほとんどふれることができなかったで、ここに改めてとり上げることにする。

有賀の総序には、昭和5年にアチック・ミュージアムにより作成された『蒐集物目安』の「まえがき」が引用されている。それは次の通りである。

「吾国ニ於ケル庶民生活ヲ中心トスル文化史ノ研究ハ日ニ旺シク加ヘテ来マシタガ、一方ソノ一分科ヲ成ス造型物ニ依ル調査研究ハ未ダ深く顧ラレテ居ラヌヤウデアリマス。ソノ第一段階ヲナス、斯種資料ノ蒐集ト保存ハ之又最モ緊急ヲ要スルモノデアリマス。近時急激ナ生活様式ノ改変ト共ニ、コノ貴重ナ資料ハ日ヲ追フテ必要ノ圏内カラ遠ザカリツ、アル状態デ、或種ノ生活器具ノ如キハ、一日ヲ空シウスル事ハ、馳テ悔ヲ百年ニ貽ス感ガアリマス。斯様ナ意義深イ事業ガ、微カナ民間個人ノ力デ救ハルベキ筈ハナイノデアリマスガ、将来斯種ノ機関ガ組織サレル迄ノ期間ヲモ、セメテ滅ビユク者ノ残骸ヲモ集メル事ガ、叶ヘラレタラバトノ微衷カラ私共ノ企ハ出発シマス。仍テ先ヅ器物其ノモノヲ出来ルダケ蒐集シ、時ニハ写真絵画等ノ方法ニ依ツテ一部分ニモセヨ之ガ原形ヲ遺シテ置キタイト懐フノデアリマス。コノ意図ハ一方造型物以外ノ、精神的産物ニ対シテモ同ジデ、妙ナ言分デハアリマスガ、最モ等閑視サレテイル領域カラ、幾分デモ調査保存ヲ為テ置キタイト希フノデアリマス。

---

3) 1897（明治30）-1979（昭和54）。

私共ハ此ノ計画ガ何処迄モ学問的ニ然モ科学的方法ニ依ル研究ノ足場ニナラン事ノ意志ヲ有ツテ居リマスノデ、徒ラニ数ノ豊富ヲ祈リマセン。仮リニ一造型物ノ採集ニ於テモ、之ガ発生ノ原因トカ、使用価値ノ変遷即チ改良又ハ退化等ノ過程ヲ知ルベキ準備ノ下ニ、ソノ用途ノ實際、材料ノ如何、製作様式等ニ関点ヲ置イテ、一方ニハ地方的ニ存在ノ意義ヲ闡明スル為ニ努メテ、採集地、名称又ハ使用者所持人トノ關係ヲモ明ラカニシタイト思ヒマス。所謂芸術耽賞ノ風ニ流レテ、根本ノ学問的良心ヲ失フ事ヲ最モ惶レルノデアリマス。別表ノ目安ハ蒐集研究ノ便宜上仮ニ定メタモノデ、造型物分類上ニモ、又種目トシテモ未ダ不完全ノ域ヲ脱セヌモノデアリマス。将来経験ヲ重ネ先輩ニ諮ツテ漸次改メテ行ク考デ居リマス<sup>4)</sup>」

また宮本馨太郎<sup>5)</sup>による第1巻の解説には、『蒐集物目安』における例示民具の分類項目が次のように挙げられている。

一 信仰生活を対照とする造型物

- 1 祭 供 品
- 2 幣 帛 類
- 3 楽 器
- 4 偶 像
- 5 仮 面
- 6 呪 具
- 7 ト 具

二 生活用度品

- 1 灯火器及び之が関係物
- 2 調理及び飲食関係
- 3 服 飾（履物を除く）
- 4 履 物

---

4) 日本常民文化研究所編「日本常民生活資料叢書」第1巻民具篇，三一書房，1972年（以下「叢書第1巻」と略記する），pp. 7-8。

5) 1911（明治44）-1979（昭和54）。

- 5 衛生保健育児
- 6 装身具
- 7 室内用度品
- 8 木地及び曲物類

### 三 産業に関する物

- 1 農耕具
- 2 山樵用具
- 3 狩猟用具
- 4 漁撈用具
- 5 紡織
- 6 運搬具
- 7 牧畜
- 8 交通交易
- 9 特殊職業用具

### 四 娯楽遊戯

娯楽遊戯賭事競技に関する器具

### 五 玩具

児童自らの製作物か或は父兄の製作して与へたもの、一般売品を含まず。以上は一斑を示したに過ぎぬ、他日最妥当と信ずる方法に依り分類補足する予定である<sup>6)</sup>。

## (2) 『民具蒐集調査要目』

昭和11年には『民具蒐集調査要目』が刊行された。これは「民具蒐集要目」と「民具調査要目」の2部から成っている。前者については拙稿(V)に記した通りであるが、後者は次のようなものである。

名称

---

6) 叢書第1巻, pp. 956-958。

- 1 名前は土地では何と言ひますか。
- 2 他にも別名がありますか。
- 3 部分名はありませんか。

採集・採集地

- 4 何時、何処で採集されましたか。
- 5 採集当時の状況をお知らせ下さい。（例へば使用中のものであったとか、農家の壁に下げてあったものとか）

製作・製作地

- 6 自製品ですか、販売品ですか。
- 7 販売品とすれば代価は幾ら位ですか、又仕入先は何処でせうか。
- 8 自製品とすれば誰が何処で作ったものですか。（製作者の年令、職業、性別等）
- 9 一個の製作時間はどれ位かゝりますか。
- 10 製作にはどんな道具を使用しますか。
- 11 特別な寸法の取り方はありませんか。（例へば長さの測定に指長、指巾を単位とするが如き）

材 料

- 12 材料には何を用ひますか。
- 13 材料は何処から手に入れますか。
- 14 材料の処理に就いてお知らせ下さい。（例へば陰干しにするとか、打ち藁の後使用するとか）

使用・使用地

- 15 主として使用してゐる土地は何処ですか。
- 16 主にどんな人が使用しますか。（使用者の年令、職業、性別等）
- 17 現在盛んに用ひられてゐますか。
- 18 現在使はれてゐないとすれば何時盛んに用ひられたものですか。
- 19 現在の代用品はどんなものですか。
- 20 どんな場合・時季に用ひますか。

21 どんな風に用ひますか。併用する民具が別にあるでせうか。

22 どんな風に保存しますか。

#### 分布

23 使用地域はどんな風に拡つてゐますか。(例へば部落全体だけとか、村、郡全体に使用してゐるとか等)

#### 由来

24 何時頃から用ひられはじめたか、何処から伝へられたか、と言ふことについて何か言ひ伝へはありませんか。

25 使用其他について俗信、伝説はありませんか。

其他御気付きの点御教示下さい<sup>7)</sup>。

『民具蒐集調査要目』の「まへがき」には、次のような部分がある。

「私共は此の計画が何処迄も学問的にしかも科学的方法に依る研究の足場にならんことを庶幾するものであります故に、徒らに数の豊富も企てませぬ。又一個の民具が使用された土地・場所から持来られた場合、使用者——村人——の生活感情に関係する方面に就いても深い考慮を払ひ度いと思ふのであります。尚又斯うした蒐集には兎角墮し易い所謂骨董的耽賞風に流れて学問的良心の失はれることも大いに警戒するのであります。<sup>8)</sup>」

この点については宮本馨太郎も「解説」の中で次のように述べている。

「民具の収集ということは、ただ単に生活用具とか生産用具とかいった道具類や造型物を作らせたり、譲りうけたり、買い求めたりして、品物を集めればよいというわけのものではない。永く学術資料として収集・保存される民具は、必らず一点ごとに名称・採集・製作・用途・分布・由来などの事項を明記した調査記録が添付されなければならない。このような調査記録を伴わない民具は学術資料ではなく、それは骨董屋や古道具屋の店頭にならぶゲテモノと何ら異なるところがない。また単なるディレクタントの趣味の収

7) 同書, pp. 949-951。

8) 同書, pp. 931-932。

集品と異なるところがない。<sup>9)</sup>」

ここにはアチック・ミュージアムの民具研究における「科学性」を読みとることができる。

### （3）『民具問答集』まへがき

昭和12年に刊行された『民具問答集』は集められたおよそ117点の民具について、その使用者あるいは寄贈者（52名）に対して、名称、採集、製作、使用、由来などの事項を質問し、回答を集めたものである。渋沢はその「まへがき」を執筆し、次のようにいう。

「民具研究は比較研究が第一である。その為には各地各種の民具の蒐集を心懸けねばならない<sup>10)</sup>」

「我々が手にした民具はその多くは何百何千も在る同一種属内の一つの個体であり而もその伝承も相当古いものがあつて一見我々は熟知して居る様な気がして居るものでも、之が民具としての物的存在丈でなく、人との交渉、家との交渉、村との交渉と云ふ風に生きた民具として見る時我々はあまりに何物も知らないことに寧ろ啞然としてしまったのであつた。一つの民具が材料が調べられて、生れ出で、用ひられ、貯蔵され、破壊され、棄てられ、死んで行くその生活行程を殊に之を用ふる人々の心意との関連を重視しながら生態学的に見究めて、大なる誤謬なき解説をすることは、現在では到底不可能なことを悟つたのであつた。<sup>11)</sup>」

「本書の解答の如きも忌憚なく云へば多くの得らるべき資料の内のほんの一部なのであつて決して全部ではないのである。全く資料の素材の一部に過ぎぬのである。只本書の解答には極めて特異な点がある。それは資料が何れも生<sup>ツ</sup>な点、是れである。我々は之を第一次資料と呼んで見たい。斯かる資料

9) 同書, pp. 959-960。

10) 同書, p. 7。

11) 同書, pp. 8-9。

が数多く蒐積されてから後之を通覧整理し、之を考査究明し初めて第二次資料即ち学問的に物を云ふ資料が生れて来るものと思ふ。物理学の実験の如く特殊の條件の下に置かれたものであつても尚且つ事實は数十百回の実験と公差とを考慮に入れて後認定される。生きものの始き民具を取扱ふ場合一つの事実と他の事実との組成、位地、価値、関係等を判定することは容易の技ではないのである。全く我々は現今あまりに早急に形成された概念的資料の雑多に悩むと共に<sup>27</sup>真実の生な資料の極めて貧弱なるに苦しんで居る実情である。本書の解答も先に云へる如く決して普遍的妥当性を持つものとは考へないが、第一次資料としては決しておろそかに出来ないものであること丈は確實である。問題は今後かゝる第一次資料を出来る丈拡充して以つて第二次資料を抽出し得る様にその土台を大にし之に普遍的妥当性を附与せしめることに在ると思ふ。<sup>12)</sup>

ここにも渋沢が目指す民具研究の科学的厳密性がうかがわれる。

しかし実際には、民具研究において学問性(科学性)を達成することはかなり困難なようである。昭和50年に刊行された『民具資料調査整理の実務<sup>13)</sup>』の「はじめに」において、宮本馨太郎は民具の収集・保存のむずかしさについて次の5点を指摘している。

- 1 民具は美術工芸品などと違い、芸術的価値も骨董的価値もないために、収集・保存されることが稀であり、長く珍重・保存されることがない。
- 2 美術工芸品などは所蔵者が分明であり、研究も進んでいるが、民具については大変たち遅れている。
- 3 民具は日常生活に即したもので、実用品であるから、改廃され、あるいは捨てられてしまうことが多い。
- 4 民具はその研究の性質上、一点だけでは資料として十分でない。同一種類のを一定地域、あるいは全国的に収集・調査し、多くの資料を

12) 同書, pp. 11-12。

13) 柏書房刊。

比較研究してこそ意味や価値が発揮される。しかし民具はいわゆるガラクタ道具であるため、値売りもできず、保管・展示の場所もない。

5 それゆえ民具の収集・保存および調査・研究はどうしても公共機関の事業としてやらなければならない<sup>14)</sup>。

また宮本常一<sup>15)</sup>の次のような指摘もある。

「渋沢の資料に対する見方は厳しい。しかし、渋沢がこの提言（民具問答集まへがき）を行ってすでに40年を経過しているけれども、渋沢の期待に答えるに足る民具図集や民具写真集はまだほとんど刊行を見ていない。いわゆる基礎作業がはなはだおこなわれている。そのために民具研究が容易に科学たり得ない現状にある。<sup>16)</sup>」

#### （4）民具と民芸

拙稿（V）の中でも若干ふれたことであるが、民具と民芸の差異を指摘することは比較的容易である。たとえば本稿の（2）で引いた宮本（馨）の「解説」の末尾の部分（「ゲテモノ」云々）にもそれがうかがわれる。また次のような指摘もある。

「民芸」は民衆の工芸の略で、その名のように民具を民衆芸術という観点から見ようとするもので、民具の持ついろいろな属性のうちの美的価値に重点を置くものである。取り扱う対象範囲は相似ていても、前に述べたような（民具を通してその背面の生活を知ることには意義がある、地域的分布の実相に注意する必要がある、等）民具の見方とは立脚点を異にしている。ときには、民具のうちのとくに美的なもの、装飾性の強いものを珍重する場合さえ生じる。もちろん、それはそれなりの意義があって尊重すべきものであるが、民具研究の本質的な立場とは基本的な相違があることは否むがたい。<sup>17)</sup>」

14) 宮本馨太郎編『民具資料調査整理の実務』柏書房、1975年、pp. 4-6。

15) 1907（明治40）-1981（昭和56）。

16) 宮本常一『澁澤敬三』（日本民俗文化大系（3））講談社、昭和53年、p. 205。

17) 田原久編『民具』（『日本の美術』第58号）至文堂、昭和46年、p. 18。

「民具にあっては、芸術性が実用性を侵してはならない。何となれば、実用性は民具にとって第一義的な要素だからである。つまり、いかに美しくても実際の役に立たなければ、民具とはいえない。民具における芸術性は、あくまでも付随的であり従属的であらねばならない。もしも、芸術性が実用性を侵犯するようなことがあれば、もはや民具とよぶことはできない。もともと日本の民具には、彩色や彫刻のほどこされることがきわめて稀れである。彩色や彫刻は、おおむね実用的でないからであって、ここに日本の民具がも一つの特徴を見出すのである。

日本の民具に、たまたま見出されるところの芸術性は、多くの場合、偶然的ないし無意識的なものであり、それが沈潜的に洗練されて、見る人々の心を打つのである。どこまでも実用性を第一義的な要素として、合理的に考えられ造られてきた民具が、偶然、客観的に芸術性をそなえていたとしても、ただちに、これを芸術品のごとくもてはやすことには、あくまでも反対しなければならない。それは民具の本質を没却することになるからである。きびしい生活を切り抜けてきた民具には、名もなき一般民衆の汗と涙とがしみこんでいる。それらを観賞や愛玩の対象とすることは、常識的にもできない筈である。いわんや、石臼を集めて庭園の飛び石につかったりするようなことは、断じて許せないところであり、民具が民具としての機能を失った状態に解体されている姿は、まったく正視に堪えないところである。

民具は、あくまでも民具として収集し保存すべきであり、そのためには、かならず体系化することが肝要である。かりそめにも、珍しいとか美しいとか、または面白いとかいうような基準で評価すべきではない。民具の評価は、あくまでも実用性に基づくべきであり、かつ、その収集は、衣食住とか生産・生業とか運搬・運輸・通信とか、それぞれの系列にしたがって行なわれなければならないのである。系列を無視した断片的な、そして趣味的な収集や、分解したり再編成したりするような保存は有害無益といわなければならない。古い民具の本来的なパターンやアイデアを応用して、新しい工芸品を創作するというのは別問題として、民具のうちから、とくに芸術性のいち

じるしいものだけをとりあげて、とくに高く評価し、これを別格視したりするようなことは、厳にいましめなければならないのである。ただし、生命の切実な躍動が美を創り出したという、いとも厳肅な事實は、見る人びとの心に、あるよろこびをあたえるであろう。それは、きびしい生活を切りひらいて行くエネルギーの源泉として高く評価することもできる。その価値は、つくる者のよろこびから、つかう者のよろこびへとつながっていることによって高められる。すべて手づくりのよさは、心がこもり、情がかよっているところにある。<sup>18)</sup>」

さらに岡村吉右衛門氏<sup>19)</sup>は次のようにいう。

「民芸も民具も分類名詞であるが、世に出た理由は違っている。民芸は美的価値発見と再認識としてであり、民具は学問の対象、そして資料としてであった。<sup>20)</sup>」

「民具は民衆の生活、それも精神文化を理解する術としての存在である。伝説、風俗や習慣、ひいては生活観念、それを分類・整理し体系づけてゆく学問の補助的な役目を果たするのが民具がもつ役割である。民具は学問的には主体ではなく従的な資料としての立場にある。ひらたくいえば「ことがら」としての器物であり道具と解釈してよいことになる。<sup>21)</sup>」

「いっぽう、民芸は分類名詞であることは民具と同様であるが、美術や貴族的工芸との対辞であり、……美的価値、つまり工芸として考えられるところに民具との相違がある。狭義には美しい民具、工芸として価値のある民具を民芸と呼ぶということが出来る。したがって民衆の工芸でなくても同様の美しさをもつものにも性格的に解釈の範囲を広げてゆくことになる。どこまでも「美しいもの」が関心の的で、「もの」から始まり「もの」に終わる。「ことがら」はつねに「もの」と「もの」とを繋ぐための従的な存在にな

---

18) 祝宮静『民俗資料入門』岩崎美術社、1985年（特装版）pp. 142-144。

19) 1916（大正5）——。

20) 岡村吉右衛門「民芸と民具」（『現代のエスプリ』第84号『民具』（至文堂、昭和49年刊）所収）。同書、p. 155。

21) 同書、p. 156。

る。<sup>22)</sup>」

ここで「もの」とか「ことがら」という言葉が使われているのは、おそらく柳宗悦<sup>23)</sup>の論文「『もの』と『こと』<sup>24)</sup>」を念頭に置いてのことであろう。言葉を換えれば「直観」と「分析」といったところであろうか。

これに対して、本稿のはじめに挙げた有賀の「総序」は両者の共通性を指摘するものとして注目される。有賀はいう。

「柳が民衆的工芸（民芸）と称したものと敬三が民具と称したものは日本の工芸の中で一続きに接続している。それは民芸も民具も共に生活文化であるからである。柳田<sup>25)</sup>も敬三も民具を民俗学の資料として見たことは共通しているが、民具は単に民俗学の資料ではない。民具はこれと共に工芸であるということを確認しなければならない。「工芸」（または民芸）という名称は物を造る側面に重点を置いているのに、「民具」という名称は造られた物の側面に焦点をおいた表現であるから、この二つは一つのことの両面を示すと解釈すべきである。柳も民芸のほか民器または民具という言葉を使用した箇所も少しはあるが、これに相当する言葉としては民衆的工芸品ないし民芸品というべきだろう。ともかく単純素朴であっても、優れた美しさを持つ民具はあった。柳はこれを民芸としてその美を認めた。敬三は民具を民俗学の資料としたので、その美的表現に対する見方をできるだけ抑制して、これらを民俗学的に取扱おうとしたが、蒐められた多くの民具が自らに示す美を讃歎している。<sup>26)</sup>」

ここで有賀は渋沢の次の文章（昭和8年9月記「アティックの成長」より）を引用する。

「アティックに集められた物を概観して不思議に感ずるのは、多く集れば

---

22) 同書, pp. 156-157。

23) 1889（明治22）-1961（昭和36）。

24) 昭和14年発表、筑摩書房版全集第9巻「工芸文化」所収。なお、この論文については拙稿（V）の（3）「『もの』と『こと』」を参照されたい。

25) 柳田國男 1875（明治8）-1962（昭和37）。

26) 叢書第1巻, p. 31。

集る程、それが、ある統一へ向って融合して行くと同時に、其処には単一の標本の上から見出せない、総合上の一種の美を感じることである。マッチのペーパーや切手を巨多に集めた感じとも違ふ。又多数一堂に展覧された書画骨董の美とも違ふ。書画の場合は、単一個体の美が強調され、その一つ一つに独立した美を認める為か、別段総合的な美は感じない。之に反して、アティックのものは、一つ一つには随分と汚らしいものが多いが、集るにつれて、一種特有の内的美を感じるのは何であろうか。田方山方浜方の我々、又我々の祖先が、極めて自然裡に発明し使用して来た各種各様の民俗品の、全体を総合して考えた時、其処に我々の祖先を切実に観、又その匂ひを強く感じ、懐しく思ふ意味に於て、自分には、今アティックの収集は、その数量に於てたとえ僅少であっても、之は今述べた全体への一部分であって、而も、それは確かに有機的な一部として、血も涙も通っているという気がしてならない。兎に角、アティックの標本は、ものそれ自身が多くの場合、売る為に作られたり、人に見せる為に作られたりしたものではなく、我々の祖先から今迄、我民族の実生活に切実にピタリとついて居る点で、極めて特殊の味がある。之を下手物とか民芸品とか云って重んずる者は、そのものゝ単独の美を逐ふのである。我アティックは全体の一部として見て、之を作った人々の心を見つめようとする。即ちアティックの標本は、我々祖先の心を如実に示現してゐる点に奇しき統一があり、其処に特殊の美を偲ぶことが出来る<sup>27)</sup>」

続けて有賀はいう。

「それは考古学者がその発掘品を考古学的資料として取扱うことのほかに、縄文式土器や弥生式土器などの美に大きな関心を持つのと同じことで、敬三が民具に見た美は、いうならば、生活美というべきものであって、個々の民具の巧拙にかかわらず、それらを用いて精いっぱい生きて来た日本人の全体の歴史をバックとした常民の心がそこには現われていることを見たのである。<sup>28)</sup>」

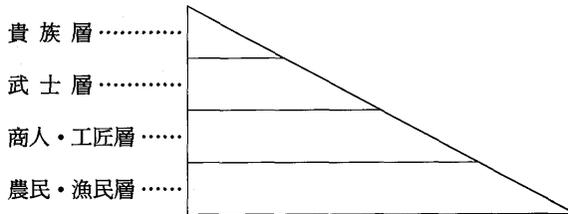
---

27) 同書, pp. 31-32。

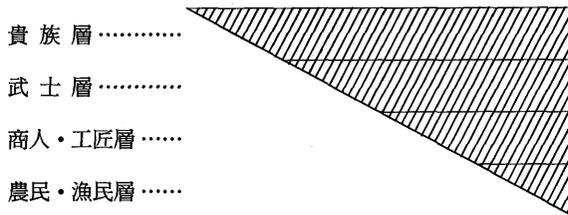
28) 同書, p. 32。

有賀がこのように積極的に柳と渋沢（民芸と民具）の共通点を指摘するのは、有賀自身、柳、渋沢の双方と交流があったためであろう<sup>29)</sup>。有賀は柳田國男との交流もあり、「総序」においては渋沢と柳田の関係も論じられている。

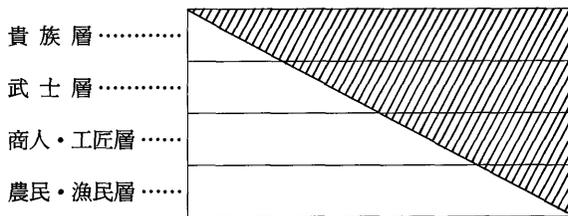
有賀の文中にもある「生活文化」という言葉を用いて、岡正雄氏は次のような図を示す。



第一図 共同体的・生活文化



第二図 個人的・芸術文化



第三図 各階層における両文化の割合の図式<sup>30)</sup>

29) 阿満利磨『柳宗悦』（シリーズ民間日本学者5）リポート、1987年、pp. 20-22参照。

30) 岡正雄「民具について」（『現代のエスプリ』第84号『民具』所収）。同書、p. 27。

ここで生活文化とは「目的からいえば、生存のための文化であり、内容的には、衣・食・住を中心とした文化であり、形式的には、類型的文化であり、性格的には、伝統的共同体文化である。<sup>31)</sup>」この文化は生産的階層に比較的強く保持され、上層社会では知識的芸術的文化の比重が大きくなる。しかしどの階層にも程度の差はあれ、両方の文化が存在する。この関係を示すのが第一～第三図である。

第三図は見方を変えると、生活用具（工芸品）の「用的側面と「美的側面の関係をもあらわしうる。すなわち上へ行くほど柳のいう「貴族工芸」的要素が強くなり、下へ行くほど「民衆工芸（民芸）」的要素が強くなるという関係である。そして図で示される「共同体的・生活文化」の割合の大きい階層における品々こそが、民具であり、同時に民芸である。

有賀は「総序」の末尾の部分で次のようにいう。

「日本の現代工業にとって、日本の民具は何の関係もないだろうか。現代工業は西洋文化の系譜を持つので関係はないと見る人が従来は多かったように思われるが、今や現代の日本工業は日本的性格を持つという見解が有力となった。日本人ほど外国文化にあこがれ、これを取り入れることにより自己改造に狂奔した国民はないように思われるが、このような状況においても、日本のどの時代も常に新しい日本文化の創造を実現して来た。何千年このかた民具の製作にその能力を投入した伝統は現代の工業の成立にも基礎的に参加していることは疑いない。工業から眼をはなして、現代の工芸美術家たちの作品を見るなら、民具との関連は著しい。だから古来の民具自体は埋没しても、民具製作にあらわれた日本人の能力は、日本人自身があるいは気がつかないでも、いたるところに連綿として生命を持ちつづけるであろう。このことを自覚してどんな機械的工芸にも新しい美を生まなければならないというのが今日の問題である。

この意味で今日民具を改めて見直さなければならなくなった。見捨てられて、塵にまみれた古い民具は長い年月の経過で磨滅していても、その材料、

---

31) 同書, pp. 27-28.

用途、形、色彩、面、線に示される生き生きとした姿は日本人の生活の古典であることを認めなければならないからである。<sup>32)</sup>」

この文章の「民具」の語を「民芸」と改めても、すこしも意図が損われぬのは、有賀が民具と民芸の間に大きな共通性を見ているからに他ならないからこそであろう。

民具研究は「具体的な民具を通して、その民具を製作した技術、その機能、それをどう人間が使ったか、その民具が他の民具とどうかかわったか、そしてどう変遷したか、その民具は人々の生活にどう影響を及ぼしたか、また次代にどう伝承されていくか<sup>33)</sup>」を課題とする。すなわち、「民具をとおして日本人の生活文化の構造と体系、さらには精神構造まで追求しようとする<sup>34)</sup>」ものである。この限りでは民具はあくまで資料である。

一方民芸は生活の中へそれを取り入れることに第一の意味がある。しかし、これに先立って当然「民芸とは何か」という問題がある。これに答えることはそれ自体ひとつの研究である。しかも前掲の「日本人の生活文化の構造と体系、精神構造」を追求することは、民芸の研究を通してもまたないうところである。それゆえ民具（研究）と民芸（研究）は問題意識の面から見ても、共通するところが大きいといえそうである。

#### (5) アチック・ミュージアムの活動

梅棹忠夫<sup>35)</sup>編『民博誕生<sup>36)</sup>』には、梅棹館長と宮本馨太郎の対談「屋根裏から民博へ<sup>37)</sup>」が収録されている。この中ではアチック・ミュージアムの状況が次のように語られている。

32) 叢書第1巻, p. 41。

33) 岩井宏實, 河岡武春, 木下忠編『民具研究ハンドブック』雄山閣, 昭和60年, p. 4。

34) 同。

35) 国立民族学博物館館長, 1920(大正9) —。

36) 中公新書, 昭和53年刊。

37) 初出『月刊みんぱく』国立民族学博物館, 1978年8月号。

梅棹 「……はじめからお話をうかがいたいとおもいますがけれども、渋谷先生のコレクションがはじまったのはいつでしたかね。」

宮本 「渋谷先生は、高等学校は仙台の二高です。仙台から東京にもどってこられて、大学の学生だったころですね。のちの北大教授で地質岩石の鈴木醇先生、東京医科歯科大学の教授の宮本璋先生など、東京高等師範付属小・中学校時代の友だちが東京の大学にきて、小・中学校以来、あつめていた植物、動物、鉱物、化石といった標本をもちよって、裏庭の物置小屋の二階にそれをあつめて展示して、アチック・ミュージアム（屋根裏博物館）と称したのがはじまりなんです。三田綱町の渋谷邸の裏のほうです。渋谷先生は大正十年、大学卒業だとおもいますが、東大の経済学部を卒業され、当時の横浜正金銀行（現・東京銀行）にお勤めになった。この年にメンバーをふやして、アチック・ミュージアムの第一回会合を正式にもつようになったんです。

ところが、その翌年だとおもいますが、先生は正金銀行のロンドン支店勤めになる。渋谷先生がヨーロッパにゆかれて、アチック・ミュージアムのほうは休業になってしまうんです。渋谷先生はむこうであちこちの博物館を見てあるかれたわけですね。ヨーロッパでは、美術館だけではなく、いろんな博物館がある。イギリス、フランスみたいに、地理学の大発見時代以来、植民地競争をやった国では、世界の、いまでいうと開発途上国の諸民族の資料がごっそりあつまっていたんですね。それがエスノロジー、民族学の発展にもつながるわけですね。そういうふうにはやく近代国家になったイギリス、フランスなどには、海外の諸民族の資料がごっそりあつまっている。また近代国家の形成がおくれたドイツとか、南ヨーロッパ、北欧の国々にゆくと、自民族の民族統一運動のために、伝統的な自民族の民族資料があつめられている。こうして、ふたとおりの人類学博物館、民族学博物館がつくられている。」

梅棹 「スウェーデンのストックホルム近郊のスカンセン野外民家博物館なんかは後者の例ですね。あれはおもしろいものですね。」

宮本 「渋沢先生はそういう意味で、アチック・ミュージアムをかんがえなおさなければいかんとかんがえられた。もうひとつは国内事情で大正二年に柳田国男先生が郷土研究をはじめ、日本の民俗学のスタートをされる。先生はどんどん郷土研究をやられて、民俗学を確立されたわけですけれども、その柳田先生の民俗学研究が、精神文化に重点をおいているのにたいして、渋沢先生は、ものに着目された。柳田先生のやり残された物質文化、生活文化の研究をかんがえておられた。ヨーロッパへ行って、こういう博物館を日本でもつくらなければならんとかんがえられたんじゃないですか。<sup>38)</sup>」

梅棹 「『民具』ということばは、渋沢先生の造語かどうかがっておりますが、いつごろからつかわれはじめたんですか。」

宮本 「『民具』ということばは、いまはひろくつかわれるようになりましたけれども、そのころはなんとよんでいいか、名前がなかったんです。昭和三年ころからアチック・ミュージアムでは、民俗資料の調査、収集、保存をやるようになった。三河だけではなく、全国の資料を収集、保存しようということになった。そのころは世界恐慌の時代で、世のなかがおおきくかわる時代で、いま収集、保存しなかったら、消滅してしまうのじゃないかというので、昭和五年に全国の同志に収集を訴えるわけです。それがガリ版でだした『蒐集物目安』です。そのときは「蒐集物」といっている。それから、昭和八年に岡書院からでた、渋沢先生の『祭魚洞雑録』、それには民俗品という名前をつかっているんです。そのころ資料がだいたいあつまつたんで、絵はがきをつくろうということになった。六枚一袋で十組つくるけれども、そのときには日本民俗研究資料というよび方だっ

38) 『民博誕生』 pp. 180-182。

た。蒐集物から民俗品とよび、日本民俗研究資料というふうになってきて、昭和九年に薩南十島の調査がおこなわれるころには、「民具」といつていた。ただ記録はないんです。<sup>39)</sup>

梅棹 「アチック・ミュージアムの収集品は日本のものだけだったんですか。」

宮本 「だいたい日本のものが中心です。ただ昭和十二年のまだアチック時代、移転するまえに渋谷先生もすでに周囲民族にひろげることをかんがえられて、調査、収集の援助をなされたし、ご自分でもゆかれました。また、わたしと小川君とは、朝鮮半島や台湾高砂族の資料の調査、収集に派遣されました。渋谷先生の半世紀さかのぼる先見の明ですね。これは梅棹先生の民族学博物館ができて、半分達成されました。諸民族の文化、人類文化の発生、発展という課題をとりあつかう博物館にたいして、日本民族文化のなにが特質かという、その生活文化、民衆文化の変遷をとりあつかう歴史民俗博物館。渋谷先生の考えは、エスノロジーとフォークロアは車の両輪で、ふたつやるべきだ。日本文化をやるには、周囲民族の文化を知らない、なにが日本文化の特質かということはわからない。また周囲諸民族を研究するといっても、その民族の人になりきれないのだから、文化の価値判断の尺度は自分のうまれそだった民族文化で、その尺度でみるわけでしょう。戦前はエスノロジー、フォークロアをひっくるめた意味で民族学とかんがえたんですね。渋谷先生は両方やらなければいけないとおかんがえてました。<sup>40)</sup>

なお、対談の中にあるスカンセン博物館には、柳も昭和4年に訪れてい

---

39) 同書, pp. 184-185。

40) 同書, pp. 189-190。

る。浜田庄司<sup>41)</sup>、式場隆三郎<sup>42)</sup>が同行した。このときの様子を式場は次のように記している。

「陶器，木工，金工，染織あらゆる北欧の美しい品々が館に溢れてゐる。而もこの美術館に附随してゐるスカンセン公園には，各地から集められた民家が建てられ，部屋はその地方の家具を持ち，住む人々はその地の衣裳を身につけてゐる。そこからは機<sup>はた</sup>の音や，民謡が洩れて来る。

……欧州で無数の美術館をみた私達も，こんなに徹底した，大がかりな，生きてゐる美術館は初めてだった。

この愕くべき施設は，ハゼリウスとよぶ先覚者が全生涯をかけたものだと  
きく。<sup>43)</sup>」

「スカンセンの丘は吾々の予想以上に美しいものだった。たゞ美しいばかりでなく大きな刺戟を与へてくれた。米国のハヴァード大学へ日本美術の講義にゆかうとしてゐる柳さんは，自分の夢想在目のあたりに実現されてゐるのを知つて，いたく興奮した。柳さんは日本へ帰つたら，ハゼリウスの真似ではなく，もつと質において洗練した品々を集めて，日本に民芸館をたて日本民芸の最高水準を確立しようと決心した。今秋，駒場に竣工をみようとしてゐる日本民芸館の発芽は，このスカンセンの丘でまかれた種である。<sup>44)</sup>」

また，「日本常民生活資料叢書」の月報1<sup>45)</sup>には，次のような個所がある。  
『民具問題集』をみて，民具はわれわれ父祖のもの，われわれの身近に生きてゐるもの，即ちわれわれ自身のものであるだけに，それらの製作過程や実体，構造，メカニズムを追求することは，常民生活の歴史を組立てることに通ずるであろうことを知った。ところが民具は生活の激変によって失われつゝある。従つて，アチック・ミュージアムが全国から民具を蒐集して保存

41) 陶芸家，1894（明治27）－1978（昭和53）。

42) 精神科医，1898（明治31）－1965（昭和40）。

43) 「スカンセンの一夜」（『工芸』70号，日本民芸協会，昭和11年10月発行），pp. 19－20。

44) 同書，p. 20。

45) 第1回配本，第1巻，民具篇，1972年9月。

をはかり、これらを系統だて、日本文化史の資料とするために一日を争うとしたことは十分に首肯されたのであった。明治以来所謂近代化へ馳足した日本が、逐次古い殻を脱ぎ捨てたのは当然であった。それにしても昭和に入り、更に大戦後に至ってそのテンポは速まり、意識的にあらゆるものを捨て去りつゝある。民具の廃絶も止むをえないかも知れぬ。渋沢氏らの精力的な活動は、たとえ充分でなかったとしても、全国から何万点かの民具を集めて、この危機に対処して呉れた。しかも集められたものゝ大部分には私が戸籍簿と呼んでいる個々のものについての必要事項が記録されて付いているのである。この戸籍簿をつくるための調査要項を、在地の研究者との問答形式で示したのが『民具問答集』である。これは同時に民具調査の指針をつくるための地均らしでもあった。このような操作を経た上で後に纏められたのが『民具調査要目』であり、個々の蒐集品に付ける戸籍簿はその要目の線に沿って作製されたのである。民間でこのような大事業が進められたことは、渋沢氏の識見によるものであり、氏の社会的地位や財力は之を補ったであろうが、それにもまして多数の同志の協力態勢を持続させた氏の熱意と人柄とがこれを成就させたのである。<sup>46)</sup>

これらの記述のうちに、アチック・ミュージアムの姿勢は明瞭に読みとることができる。

---

46) 八幡一郎「内と外の民具」